

# 看護大通信

32



見習生として数カ月過ぎ、看護する手応えをつかんだのです。

新潟県立看護大学  
基礎看護学領域・看護技術学

准教授 水口陽子

五月十二日は、看護の心を広く分かち合うために、ナイチンゲールの誕生日にちなんで「看護の日」とされています。クリミア戦争での「ランプを持って歩く婦人」の姿は有名ですが、実際の彼女については案外知られていないことが多いと思いますので、少しお話ししたいと思います。

## 「看護の日」とナイチンゲール

彼女が生まれ育った十九世紀のイギリスは、産業革命の完成期にあたり、

鉄道を整備など多くの進歩を遂げる一方で、コレラの大流行など、まだ衛生面では不安があった時

代です。広大な土地を持ち、夏の別荘・冬の別荘のある裕福な家庭に育ったナイチンゲールでした

が、看護の道へ進むまでには苦悩もありました。二十五歳ごろに病院で働きたいと言うと、家族は猛反対しました。女性は家庭を守ることが主な役

クリミア戦争の時、彼女は兵舎病院に毛布や掃除用品などを取り

寄せることに奔走しました。そして、重病人の食事がゆでた固い肉であるのを見て、有名なコックを呼び寄せ、栄養のあるスープを作ら



看護は援助や生活指導をすることでの調整をサポートしていくと考えていました。また、病人だけでなく健康人も生活を整えることで健康を保てる

主張しました。現在ではさまざまな看護の定義がありますが、看護の専門性を明確に示したのはナイチンゲールが最初です。

目で、女性の仕事といえは家庭教師くらいでした。その後、彼女はドイツのカイゼルスウェルト学園内にある学校や病院で、シスターが働いていることを知り、三十歳の時に初めて見学する機会を得ました。二回目には家族には旅行という名目で、

せました。その後、著書『看護覚え書』に、「看護とは、生命力の消耗を最小にするために生活過程を整えること」と書いています。人間には本来自然治癒力が備わっており、その力を引き出すために、清潔の保持や食事、睡眠などの生活調整が大切です。